

サトウとシオ

イラスト 和狸ナオ

たとえば

ラストダンジョン

前の村の

少年
★が
序盤の街で暮らす
ような
物語



プロローグ

お前には無理だと村の人々は口々に言いました。

ロイド・ベラドンナのことです。

彼は柔和な笑みが印象的な好青年で、その見た目通り荒事よりも炊事や掃除、洗濯が得意で自他ともに認める「村一番のか弱い男」です。村の娘たちに「いいお嫁さんになれるね」なんて言われるのははや日課の域でした。

川に潜つても魚を捕れたことは一度もなく、薪を集めるのも日が暮れるまで時間をかけては人並み以下、戯れに村の男たちと組手なんぞしたら次の日は丸一日寝込んでしまった——などなどの逸話を上げれば枚挙に暇がありません。

そんな彼が突然、村を出て王都の軍人になりたいと言うものですから……加えてとても素直でお人よしな上騙されやすい性格なので村の中には軍人志望は疎か村から出て行くことすら反対の人間も少なくありませんでした。

ただいつもだったら日和見で周りに流されやすいロイドですが今回ばかりは違いました。その素朴な顔立ちの奥から、ある種の気迫をにじませて下唇を噛み締めながら己が決意を語る

のです。

初めて見せる彼の一面に村の人間も困り果て、遂には村長に説得してもらおうと会合が行われるまでとなりました。村の行事や政を決める以外では減多にないことです。彼が村のみんなに大事にされている証拠でしょう。

ロイドが軍人になりたいと言った数日後、昼下がりに一仕事終えた村の顔役たちに彼は村長の屋敷へと連れて行かれました。

村の北側にある小麦畑が一望できる風通しのよい広間の上に、まるで悪いことをした子犬のようにロイドは縮こまって座ります。傍らに育ての親のお爺さん、そしてそれを囲むように村の顔役たちが鎮座し心配やら苛立ちやら、思い思いの顔を向けています。

緊張し汗が浮いたロイドの額を、まだ青い小麦畑の香りとともに春風が撫でていきます。

その風に揺れる麻の暖簾の奥から玉のようなかわいい声が響いてきました。

「すまぬみなのお、待たせたの」

そしてほどなくして、ひよっこりと木綿のローブを羽織った黒髪ツインテールの女の子——ぱっと見齡十二歳前後——が姿を現しました。

彼女がこの村の村長アルカです。ちんちくりんではありませんが年齢はとうの昔に百歳を超えていて正確な年齢は本人も含めて誰も知りません。

本人曰く「世界を救うため不老不死になった云々カンヌン」と言っていますが誰も信じずそ

の件は今では完全にネタ扱いです。まあ所謂ロリババア……ただそのことを口にするると小麦畑に首から下を埋められて三日三晩放置させられるそうですが。

そんな実年齢以外は言動が女子中女生的の村長アルカはローブの余った裾を掴みながらトテトテと上座に歩み腰をかけました。

竹で編んだ座椅子のギシとしなつた音が静かな広間に響きました。間をおいて彼女はロイドに子か孫に尋ねるような声で話しかけます。

「ロイドや……王都の軍人になりたいのかえ？」

その瞬間、ロイドが返事をする間もなく、お爺さんが反応しました。

「村長からも説得してください！ お前には無理だと！ こいつ昔から変なところで頑固なんですわ」

たまたまロイドが反論します。

「無理って……やってみなきゃ……わからないよ……」

「って何言ってるんだこのバカモン！ 薪もろくに集められない、川の魚なんて捕ったことすらないお前に軍人なんて勤まるわけないだろう！」

「た、確かに魚を捕れたことは一度もないよ。でも王都じゃ魚以外の食料だってきつとあるはずだし大丈夫だよ……それと潜るのが苦手なだけだから……都会で水に潜る機会なんてそうそうないはずだよ」

その言葉に口を開いたのはふくよかなおばさんです。彼女は我が子をたしなめるようにロイドを説得します。

「ロイド、お爺さんが言っているのはそういうことじゃないの。あなたの体力のなさを心配しているのよ」

「ごもっともと、お爺さんは大げさに首を振ってはうんうんと唸るのでした。」

「んだんだ。そんなこともできねえで軍人なんてなれっこねえべ。それに、苦手って言うのも限度があるじゃろ」

今度は腰に古めかしい剣を携えた精悍な顔つきの青年がぶつきらぼうに言い放ちます。

「屁理屈こねて言い訳してんじやねーつての。いつまでも苦手なのを克服できないお前が悪いんだぜ」

「うう」

落ち込むロイドに青年は露骨に顔をしかめながらいやらしそうに付け足します。

「——だいたいよ、水中に一時間しか潜れないなんて話にならないぜ」

「そうね最低でも三時間は潜れないと、お爺さんの若い頃なんか三日は潜ってたわよ」

「四日じゃ」

自慢げにお爺さんは四本指を立てるのでした。

——ちなみに素潜りのプロとも呼べる海女さんは平均約五分ほど、世界記録は二十二分超

だそうです。参考までに。

お爺さんはいとうと「おーすげー」さっすが爺さん」と他の村人からの賞賛を浴び若干ニヤケ顔になります、すぐに取り繕い元の威厳たっぶりの顔つきに戻し、ロイドのほうへ向き直るのです。

「ええかロイドや、それにたかだか牙や角が生えた魚程度で苦戦してどうする。きつと海なんかもつとやばい魚がいるに決まってるぞい」

「でも小説とかじゃ牙とか角のない魚もいて都合じゃそれを食べているって」

「馬鹿こくでねえ！ 牙も角もない魚がどうやって生き残っているんだ！ そんなにおつたら根こそぎ捕られて全滅待ったなしじゃ」

「う、たしかに……」

——ちなみに彼らの言う魚とは『キラ・ピラニア』というれっきとしたモンスターです。頑強な角と、牛すら三口で食べきってしまうほどの大きな口と牙を持ち手練れの戦士です。水中では手も足も出ない代物です。

ぐうの音も出ないロイドに追い打ちをかけるように、次は作業着に身を包んだ木こりが声をかけます。

「泳ぎが苦手だとしても、木を切ったりだとか薪を集めるくらいはもう少しできるよになったほうがいいと思うが……」

静かに、ゆつくりと悟す木こりに続いてお爺さんが斧を振る仕草を見せました。「そうだ、『トレント』に気付かれねえように近づいて一発で仕留められねーと一人前とは呼べねえよ」

ブンブンと振り下ろす仕草のお爺さんに意義ありと言わんばかりに身を前に出しロイドは反論するのでした。

「でもさじいちゃん、本とか小説じゃ王都は『トレント』じゃなくて普通のブナとか杉の木を薪にしているって書いてあるよ」

「はあ……お前小説のことを信じておるのか」

額の汗を手ぬぐいで拭きながら呆れお爺さん。横から木こりがそれは聞き捨てならんと口をはさみませ。

「ロイド、そんな普通の木を薪にしたってせいぜい三時間くらいしか燃えない。トレントは丸三日間は燃え続ける。言いたいことはわかるな?」

「んだ、どっちがいいかは馬鹿でもわかるで、普通の木なんて使ったら冬こせねーだよ」

「確かにトレントのほうが断然いいけど……」

——ちなみにトレントとは木の姿をしたモンスターのことです。近づいた人間に木の根を突き立て養分を吸ってしまう恐ろしい魔物です。大体は倒したら消えてしましますが気が付かれずに倒したり運がよかつたりすると形が残りそれは貴重品として大金で取引される代物です。普

通は薪の代わりにしません。そんな様子を見たら商人だったら声をからして喚くでしょう。

木こりは部屋の柱に背を預け腕を組むと自分の仕事について話し出します。

「木こりってのは村の家屋や冬の暖の為、汗水たらして働く大変な職業なんだ。それに薪だけじゃない、魚だって『買えばいい』のひと言で済ませてはだめだ。そんな気構えでは軍人なんてとてもなれないぞ」

強い口調で忠告する木こりに、ロイドの顔が陰りました。そして思った以上に落ち込む彼を見て慌ててフォローします。

「あ、いや、何もロイドに木こりの技術を身につけてから都会に行けと言っているわけじゃないんだ。音を立てずに忍び寄る歩行も、森に完全に溶け込む迷彩技術も、都会では必要ないかも知れない」

木こりでも必要ないと思います。

「……すまない、強く言いすぎた」

謝る木こり、そして叱咤されたロイドは下を向きながら安直な考えを猛省していました。そこに先ほどの青年がトゲのある言い方で声を投げかけます。

「そんな魚がいるとか気構えとか問題じゃねーんだよ。ロイドが弱いくせに軍人様になろうってのが一番問題だろ」

「それはあんちゃんが強いから」

「こないだの剣の手合わせん時もかなり手加減したんだぞ。それでも次の日、丸一日寝込みやがって……いじめでもしたんじゃないかって、すげー悪者扱いだったんだぞ」

「うう……」

嘆息を一つはさんでから青年は苦笑交じりで続けます。

「ハァ……だいたいな、骨折ぐらい一時間で治せよ」

「全身複雑骨折じゃ丸一日くらいかかっちゃうよ！」

「何言ってるんだ！ 骨折なんてせいぜい長くても三時間だろ！ 爺さんなんか『やー』のかけ声一つで治したぞ」

——ちなみに骨折は一般的に重症の部類です。一か月はギブスと付き合う羽目に……って言わなくてもわかりますよね。

そして青年は腰元の柄に二匹の蛇が彫られた古めかしい剣を抜き放ちながら、ロイドに説教を続けます。

「そもそもだ！ こんな古ぼけた剣が当たったくらいで骨折なんてしてんじゃないねー！ 何だっけこのなまぐらの名前？ ガールズバーだっけか？」

「何じゃったかな？ カレーバーとかエクスカリバー……いやガリガリバーじゃったかな」

——ちなみにこの古めかしい剣の名前は『エクスカリバー』かの有名なアーサー王の伝承における神秘の剣で実に九百六十人も敵を切り倒したと言われ、またカリバーンやコールブ

ランドなど様々な異称があることで有名です。

「そうそう、ガリガリバーだ。なんか氷菓子みたいな名前だったなコレ」

神秘の剣が身も蓋もありませんでした。一回正解はさんだのにスルーです。

「たく、俺もオヤジから譲られなかったらこんななまぐら使ってねーっての……とにかくこんなでイチイチ怪我していたら埒があかねーってことだよ」

その流れに乗ってお爺さんが今度は別のことでロイドを説得します。

「それにロイドや、おめえさん体力もそうだが魔法だつてろくなくもん唱えられねえだろ」

「あーそういうやお前なんか唱えられたっけ」

魔法と聞き、少しばつの悪そうな顔をしてロイドは答えました。

「んつと術式は色々知っているけど……使えるのは雨を降らせる魔法とか……」

ロイドの搾り出すような声を聞いた青年は大げさに首を振りました。

「雨なんざほっとさや勝手に降るだろう……せめて村長みたいに空から岩を降らせるとかよお……何だっけ、隕石だったっけ」

「隕石じゃな。懐かしいのお、昔裏手の山に出たモンスターを追っ払った時のことを思い出すわい」

「あん時の魔物は傑作だったぜ『世界を滅ぼす』とか『人間は増えすぎた』とかわけのわからんことをグチグチと言ってたな、ハハハ」

おや、徐々に思い出話に花が咲き始めてしまったようですね。

「聞いてくれよ！ ついこの間なんか人間の姿してくっちゃべって来てさ、いざ追い詰められ
たら『この姿になるのも久しぶりだ』なんていってトカゲに変わってさ。いやー笑った笑った」
「だったら最初からその姿で来いってな、結局村長呼んでる間おぼちゃんのがのしたんだっけ？」
「そうなのよ。二、三発ホウキではたいしたら動かなくなっちゃって、後片付けが大変で——」
話が脱線し、酒の席のような雰囲気になってしまったこの場をアルカが手をバンバンと鳴ら
し空気を戻します。

打ち水を打った後のような静けさがまた広間に漂いました。

「思い出話はこのくらいにして……のおロイドや」

「は、はい」

「みんなの意見を聞いてもまだ決心は変わらないのじゃな？」

「——ハイ」

静かに燃える眼を向けロイドは彼女を見つめます。対してアルカはというと、

（ついにこの時が来たんじゃないかな……ロイドが軍人に興味を持つように軍人が活躍する小説をし
こたま読ませたかいたわい）

なにやら意味ありげなことを考えていました。そして思惑通り事が運んだことを気取られぬ
よう優しい笑みを携えロイドに言いました。

「——よかろう。この村を出て王都で軍人を目指すことを許可する」



「村長！」

周りの大合唱にやおら立ち上がりアルカは「静まれ」と手を掲げます。

「——外を知る、ということとは成長にも繋がることじゃ。見聞を広げることがロイドに必要なだと思うぞい」

「しかし村長」

「それに男が一度決めたことよ。口出しするのも野暮つものじゃよ」

そう言うとアルカはくるつとロイドのほうに顔を向けます。母親が子に向けるような顔でした。「でも、辛くなつたらすぐ戻ってくるんじゃよ……ここはお主の村なんだからのお」

「は、ハイ！」

みんなはその顔を見て「一番辛いのは村長なんだな」と察してなにも言えなくなってしまうのでした。

さて、そんなアルカはというと、

(ロイドと毎日会えなくなるのは辛いのが……ま、瞬間移動でこっそり会いに行けば万事オッケーじゃしな……むしろ村人の制止がなくなりイチャイチャチャンス！)

……この脳内を村の人間にさらしたら別の意味でなにも言えなくなってしまうでしょうね。かくしてロイドの上京は晴れて許可されたのでした。

ロイドの上京の件が決まってからというものの、月日が経つのは早く、それはロイドがこの村を好きで村の人たちもロイドのことを大事に思っていたことを確かめるような、愛おしくほんのり切ない日々でした。

そして遂に出発の日。空はロイドの門出を祝うかのように端から端まで青々と澄んでいます。その青天の下、厚いテント地の丈夫なズボンと動きやすい麻のシャツ、そして小ぶりのナツプザックといった——正直「え？ 日帰り旅行？」と勘ぐってしまうかのような格好のロイドがそこにいました。なんとも申し訳なさそうな表情です。

それもそうでしょう、村の人間全員が各々の仕事を後回しにしてロイドを見送りに来たのですから。立派なアーチのかかった木造（トレント）の門が村人たちで埋め尽くされていました。その中心にいる村長のアルカは一歩前に出ると。しげしげとロイドの顔を見つめます。

「本当は途中まで一緒に行きたいのじゃが……これも一つの勉強じゃ、一人で行くがよい」

実際は村長と一緒にするとそのままついて行って帰らなくなることを村の人々が危惧したためです。「ロリババアの溺愛ここに極まれり」は村の共通認識なのでした。そんな思惑など知らずロイドはさわやかに、そしてどこか寂しげに「はい」と返事をします。

そして親代わりのお爺さんが近づきロイドの肩をバンバンと叩きます。

「王都はこの大陸の南端じゃったる？ 走って二日かの、トレーニング感覚で行ってこい」

「あはは、いいちゃんの若い頃と比べないでよ——大体一週間かな」

「そんなのんきなこと言っておると都会の流れについていけないぞ。都会の人間はみな忙しないと聞くからの」

「う、ん。頑張るよー!」

少し上ずった声のロイドに「泣くなよ!」なんて野次が飛んできます。場が小さな笑いに包み込まれました。

「おおそうじゃロイド。王都についてたら『イーストサイドの魔女』って奴に世話になりなさい。この水晶を見せたらきつと協力してくれるはずじゃ」

アルカが手渡したこぶし大の水晶をナツプザックに詰め込むとロイドは柔和な笑みを浮かべ、

「ありがと村長。ありがとみんな。——行ってきますよ!」

何度も振り返りながら山道を降りていくのでした。その姿を見届けたお爺さんはついつい不安をつぶやきます。

「ふう……しかし大丈夫かのロイドの奴は」

その言葉にアルカはぼろつと本音をこぼしてしまいました。

「全然余裕じゃろ——ってゲフン! なんでもないぞい! さあみんな仕事に戻るんじゃ!」

アルカはちよつと「やっちゃった」という顔を咳払いをしてごまかすとみんなを村の中へと誘導するのでした。

(ほんととは弱くもなんともないのに周りが輪をかけて強いせいで自分を卑下しているからのお。

この旅で自信を付けてほしい次第じゃ……そして——)

アルカはもういなくなったロイドのほうを向きました。暖かい春風が頬に触れ、遠くの山脈を見る目が細くなります。

(ワシの悲願のために……頑張って軍人になるんじゃよ、愛しいロイド)

ここは最果ての村『コンロン』

古の英雄たちが世界を救った後、世俗を離れ安らぎを求めた集落。

この村の人間はみな、英雄の子孫にあたります。

そんな人外の集う村の中で最も弱く最も素直な少年『ロイド・ペラドンナ』

この物語は彼と、その周囲の織りなす『勘違い』で綴られていく、そんなお話です。

——そうですね、今風に例えるならラストダンジョン前の村の少年が都会にあこがれ序盤の街で暮らすような物語……といったところでしょうか。

第二章 たとえば新しい部下が社長の息子だと発覚した時のような手のひらの返しよう

さて、ではこの物語の舞台『アザミ王国』についてお話ししましょう。

この国は大陸の南端に位置し暖かい気候に恵まれた過ごしやすい地域です。加えて海産物豊かで穏やかな海に面し、大陸を縦断する大河が国へと繋がっているため物流に関しては近隣諸国と比べ頭一つ抜けていました。

そんな交易の盛んなアザミ王国は大きく5つの区にわかれております。王家や貴族が住まい軍部が駐屯する中央区、国の玄関とも言える様々な商店が集うノースサイド、整理されたベツドタウンとも呼ばれるウエストサイド、交易の要である港に一番近くノースサイドとはまた違った活気を見せるサウスサイド。

そしてロイドが向かうイーストサイドはというと、身も蓋もない言い方をすれば王国の吹き溜まりというような場所です。

王国内にあつて王国とは言い難い治安で、まるで急な来客の際のとりあえず見栄えだけでもなんとかする為にあれやこれや無理やり押し込んだ感のあるタンスの中身のよう(1)に猥雑とした区、それがイーストサイドです。

中流から下流の家庭が大半ですが、ちよつと奥まった所に行くと多種多様な人間による独自の

法が存在する別世界が広がっています。

ヒビの走つた何年も手入れされてない石畳、ゴミなのか商品なのかわからない何かに木切れの値札が無造作に引つ付いている家屋の軒下、無駄に露出の多い妙齡——いや、高齢に片足突つ込んだ女性たちが気だるげに談笑していたり……と、寂れた光景が来るものを迎え入れます。そんなイーストサイドの裏通りを夜半、小さなナツプザックを肩にかけ田舎者丸出しでロイドはキョロキョロしながら目的地へ向かつていったのです。

無論そのような出で立ちで裏通りを歩くなど「カツアゲおなしヤす」と言わんばかりですから速速勤勉なチンピラたちが足早にロイドのそばへと寄ってきました。

チンピラは威嚇しながら歩いてきますがロイドは意に介さず素通りしようとしています。

「無視つてか……へえ、じゃあこの手で絡んでやるか」
先頭を歩くチンピラは肩を思い切りぶつけてきました。俗に言う『当たり前屋』という手口です。どういう手口かという……

「あああ痛えええええ！」

このように自らぶつかり痛がる素振りを見せ、

「あ、兄貴！ てめえどう落とし前つけてくれるんだ小僧！」

と、因縁をつけて小銭をせしめるといったやり方です。みなさんも繁華街などでは十分お気を付けてください。そして不運にも当たり前屋に絡まれたロイドは呆けるばかりです。

「へ？」

「へ？ じゃねえよコラ！ 兄貴の肩イカレちまつてんじゃねえかコレ！」

「痛え！ マジ痛てえ！ 医者！ 骨イってる！」

「でも軽くぶつかっただけでしょ？」

「医者！ 医者！」

脂汗をにじませ身をよじり、兄貴と呼ばれる男は追真の演技？を続けます。「今日の兄貴はノってるなあ」と思った弟分も熱演にあてられ気合が入ります。

「なわけあるか！ 慰謝料だ慰謝料！ 有り金！ 身ぐるみ！ 全部おいてけ！ もちろんパ
ンツも脱いでいきやがれコラ！」

「いしやあ……………」

弟分が金銭とパンツを要求している最中も兄貴分は悶々苦しんでいました。そして次第に弟分も彼が演技ではなく素であることに気が付きます。

「え？ 兄貴？ ……………ガチですか？」

「ガチじゃあ！ 腫れてるだろうが、こんタボスケがあ！ い、医者じゃこらあ！ ……あ、
これマジでダメなやつツ」

その悲痛の叫びを見て、弟分はしばし呆然とした後、先ほど以上に血走った眼でロイドを
睨むのでした。

「あ、兄貴いい！ てんめえええ！ どう落とし前付けてくれるんだ小僧おおお！」

「あの、さつきも同じこと言われましたけど」

「うっせえ！ 今度はマジじゃあ！ こっちは早く兄貴を医者に見せなきゃなんねえんだ！
グダグダ言つてねえでバシッと誠意を見せたらんかコラ！」

そう言いながらサツと手を差し出し金品を要求するチンピラを見ても未だロイドは小首をか
上げたままです。

（えっと……バシッと？ 誠意？ うーんタツチでもすればいいのかな？）

そう思いチンピラの手のひらを「バシッと」軽く叩きました。彼にとつての『軽く』、みな
さんお察しの通りです。

バツシイイイイン！ と耳をつんざくような音が裏通りに響きます。軽く叩かれたチンピ
ラの手のひらは三回転ほど肩の周りをぐるぐる回り地面に不時着……墜落しました。

「ほんぎやあああああ！」

今度は肩と手のひらがイカれた弟分がのたうち回る形と相成りました。チンピラは二人仲良
く泥まみれです。

「え？ 何ですか？ 軽く叩いただけなのに？」

その大げさを超えたチンピラのリアクションにロイドは戸惑いを隠せません。心配し近寄る
と彼らはゴキブリのように這って彼から距離を取ります。

「お、覚えてやが……いやっ！ 忘れてください！」
 テンプレートな捨て台詞すら卑屈になるほど心の折れた二人はお互いを支えあいながらよろよろとこの場を去って行くのでした。

「ああ……大道芸の人か何かかな？ 都会だし」
 呆気にとられたロイドは『都会』という魔法の言葉で無理やり解釈するに至ったのでした。そんなこんなで彼はなだらかな坂道の途中にある雑貨屋にたどり着きました。店の軒下には古さくいな葉ツボが数点、そして小さな看板には申し訳程度に「葉ありマス」と書かれていました。明らかに胡散臭そうな雰囲気か逆に魔女っぽさを演出……そんな店構えです。

「ここがイーストサイドの魔女さんの所か」

ノックをするのもためらわれるくらい古びた扉の隙間から明かりがこぼれています。中に人がいることを確認したロイドは控えめに「ごめんください」とひと言添えて中へと入りました。錆びた蝶番のせいでやたら重たい扉の先には全身黒のローブにつばの広いとんがり帽子、ふちなしメガネでばつちり決めた『いかにも魔女』な亜麻色の髪の女性がコーヒートを片手に本を読んでいます。年齢はロイドと同じくらいに見えますが、それを感じさせない空気を纏っています。

店内もまた『いかにも魔女』で作りかけの薬と乳鉢にゅうぼつ 見たこともない毒々しい色合いの植物の鉢、古めかしい書物が床に積まれており「らしさ」を強調しているのです。

「……………」

彼女は手に持っている分厚い本に落とされた視線をかつたるそうにこちらに向けるとしばしロイドを眺めた後、また視線を本へと戻しました。本をめくる音だけが部屋に響いています。

あまりの対応にどうしたらいいのかわからなくなったロイドはただ立ち尽くすだけです。それにしびれを切らせたのか黒づくめの女性はセミロングの髪を耳にかけ、

「何かしら」

とぶつさらばうな言葉を浴びせました。ゆつたりとしたローブの上からもはっきりわかる豊満な胸が発した声で震えます。

「あ、の……イーストサイドの魔女を尋ねると言われてここに来ました」

「ふうん、誰かの言伝かしら少年？」

「あ、いえ。使いの者ではなくて……」

「へえ、じゃあ私を『魔女』と知ってのお客様ね」

コーヒートをすすり、本を閉じると魔女は向き直りメガネの奥の妖艶な視線で睨め付けます。「君みたいなき若い子が魔女にものを頼むということ、それがどんなことかわかっているのかしら？」あまりにも仰々しいことを言われロイドは気後れしながら答えます。

「いえ、僕はそのただ尋ねると言われただけで」

呆れた顔で魔女はため息をつくと言ったように返しました。

「——古来より魔女とは対価を求め望みに応えるもので、相応の贄にえを出す覚悟がが必要よ。それを知ってもなお求める望みは何なのかしら？ どのような無理難題でもこの魔女マリーが導いてあげるわ——後悔のないようにね」

半ば脅しにも似たセリフ、ロイドはゴクリと唾つばを飲み込むと意を決し伝えます。

「ぐ、軍人になりたくて田舎から上京してきました！ ちよつとの間お世話になります！」
しばし間があった後、魔女は咳払い一つ。

「コホン……古来より魔女とは——」

「あ、それさつきも聞きましたけど」

「とつとと宿探して広場の募集要項でも見てこいこんちくしようめ！」

先ほどまでのエキゾチックな雰囲気たつぷりの魔女は、一転して弟を叱しかる姉のように椅子から立ち上がって怒りました。シユンとするロイド、続けざまに魔女は悪態をつきます。

「まったく……魔女を便利屋か慈善事業か宿屋とでも勘違いしているのかしら！ そんな風に伝わっているの？ どの田舎出身よう！」

「えつとコンロンって村です……」

「あつそう。じゃあ村に帰ったらちゃんと伝えてちょうだい、古来より魔女は……ん？ こんろん？ コンロン？」

椅子に座り直した魔女は顎に手を当てなにやら思い出す仕草を見せます。そして次の瞬間大

事な忘れ物を思い出したかのような血の気の引いた顔になりました。

「えつと……少年、ちなみに、ですが、村長様のお名前は？」

「え？ アルカですけど？」

その名前を聞いた瞬間魔女の背筋がピシツとなり顔面は蒼白のまま汗だくになりました。手なんか軽く握って膝上に乗せまるで面接を受ける就活生のようです。

そしてそのまま「いやしかし同名という線も捨てがたく今更いまさらいつたい何の用だろ……」と呪文のようにぶつぶつ言い始める始末です。そんな魔女を眺めていたロイドは何かを思い出し、小ぶりのナップザックの紐を解き、中を漁りました。

「そうだと思います。これ見せたらいいと言われたんですが……」

おずおずとロイドがこぼし大の水晶をテーブルの上に置いた瞬間、

「望みが潰つぶえた！ あの人で間違いない！」

魔女はシュートを外したフットボール選手のごとく天を仰ぎます。

一方ロイドはその様子をつぶさに見つめ「コミカルな人だな」と感心しきりです。

その視線に気が付いたのか、魔女はというと急いで帽子を脱ぎ、先ほどまでの余裕などなかったかのような俊敏な動きで亜麻色の髪を振り乱しながらコーヒ―を淹れ始めました。

「すいません気が利かなくて！ で、本当に言伝とかないんですか？ もしかして今、村長様が一緒に来ているとかそんな恐ろしいことは」

「いえ、言伝はありませんし自分一人で来ました」
一人という言葉に魔女は「しゃオアア！」と雄叫びを上げ豪快にガッツポーズを決めます。
大人びた雰囲気はどこへやら。そしてその姿勢のままロイドに尋ねます。

「えーではマジで宿代わりに私の家を……」

「と、とりあえず水晶を見ればわかるって言われたので」

二人の視線が件の水晶へと向けられた次の瞬間でした。オーロラのような粒子を纏った光が水晶の奥から広がっていき人の形を作り出していきます。

徐々に輪郭を現すその人物はロイドのよく知るコンロン村の村長、アルカでした。そしてそのツインテールのよく似合う幼い容姿を目の当たりにした魔女はとうとう、

「フヘー」

よどみのない動きで土下座をしていました。そして額を惜しげもなく床に擦り付けながら「勘弁してください——」と繰り返し繰り返し口から発しています。

そろそろ床から煙でも出るんじゃないかと思つたタイミングで水晶から映し出されたアルカが喋り出しました。

「——久しぶりじゃのマリー、お主の師匠のアルカじゃ。覚えてるかい？」

「フヘー」

古来より魔女云々と言っていた彼女の威厳はすでにどこぞへと消えていました。



「何年かぶりでこんなお願いするのもあれなんじゃが、私の大事な大事な村の子供のロイドが王国の軍人になりたいなんて言い出して……ま、普通に合格すると思うんじゃがそれまで王都での面倒を見てほしいんじゃよ」

魔法は土下座を維持したまま質問を始めます。胸が窮屈そうです。

「フヘー……失礼ながらお聞きしたいことがいくつか……」

「あ、そうそうちなみにこの水晶の映像は録画だから、そっちの質問には答えられないのじゃ、すまん」

その言葉を聞いた魔法は次の瞬間、

「なーによ脅かしちゃってこのちんちくりん！ 相変わらず成長してないわねーへっへー」

豪快に立ち上がると、ころりと表情を変え水晶をべちべち叩きながら笑い出すのでした。

で、その録画であるはずの映像はひと通り魔法の手のひら返しを見た後、口の端をにんまりと歪めながら彼女に視線を向け直します。

「——なーんて言ったらすぐほろを出すのは相変わらずじゃなマリーちゃん」

「フヘー」

黒のケープを翻しながら魔法は瞬時に床に突っ伏しました。土下座です。その様子を氷の微笑で見届けた後、アルカは興味をなくしたようであれ口調で言いました。

「まあよい、久しぶりにお主の無様な姿も見られたしの……とにかくよろしく頼むぞ。仮に試

験に落ちてしまっても主ならなんとかしてくれるはずよな、マリーちゃん。んじゃヨロシク……ロイドや！ 寂しかったらいつでもワシが添い寝してやるぞい！」

そしてその言葉と同時に映像は光の粒子となり消えていきました。残されたのは棒立ちのロイドと胸が潰れるほど突っ伏す幼き魔法、なんともシユールな光景でした。

ロイドは添い寝と言われ恥ずかしい顔を浮かべています。その足元ではもぞもぞと魔法が起き上がりまわります。ロイド以上の「やっちまっつた」感溢れる恥ずかしい表情でした。

黒ずくめの服装を整え、灰色のホコリをアクセントに添えた髪の毛を手櫛で整え、メガネを直すと、髪を切ったかのように大声で叫び出します。

「——ちくしょうめええええ！ やつと解放されたと思ったのに！ 急に変なこと頼みやがってあんろリババア！ ロリバババア！」

そして憎しみを込めクローゼットの中に水晶を放り投げると乱暴に扉を閉めます。家具は大事に扱います。

肩で息をする魔法はその様子を気まぐすく見つめるロイドに気が付き、落ち着きを取り戻したのか椅子へと座り直します。

「はあ……はあ……ま、まあ頼まれた以上は仕方がないわ。試験までの間ちゃんと面倒見てあげるから……えっと」

「あ、ロイドです。ロイド・ペラドンナです」

「オッケーロイド。あたしはマリーよ『イーストサイドの魔女』なんて言われているわ」
 「あ、あのなんかすみません。急にこんなことになってしまって、自分に行けることならなんでもしますから」

その眉根まゆねの寄った困り顔に毒気が抜かれたマリーは優しい口調になります。

「ま、別にそんなに畏かしこまらなくてもいいわよ。とりあえず奥の部屋貸してあげるから荷物置いてきなさいな。泊まり客が来ると思っきてなかつたから汚きたないし、もう遅いから今から片付けなと寝る時間ないわよ。テキトーに隅すみっこに寄せるだけでもいいから」

そう言ってマリーは奥の部屋を指さしました。

「あ、ハイ！」

ナツザックを抱えるとロイドはそそくさと部屋に向かいます。途中くるとマリーのほうを向いて柔和にやわらかな笑みを浮かべながら「これからよろしくお願いします」と律儀に一礼して部屋へと向かいました。

一方、急に同年代の同居人が増えたマリーはその後姿を見て、

「コンロンコンロンの村の……あのロリババアの関係者だけど素直でいい奴ね……意外だわ」

そう漏らすとすっかり冷たくなったコーヒコーヒーをすすり直します。

「ま、あのバカ師匠が頭のネジ二つか三つぶっ飛んでいるんでしょうけど」

そして「どこまで読んだっけかなー」としおりを挟まず閉じた本をめくっていると。

「ああそうそう、いくらかわいくていい子でも手なんか出したらお主を一生カエルにでもするからそのつもりでの」

クローゼットから映像ではない本物のアルカがひょっこり現れたのです。

「フンプ！」

盛大に噴出された褐色かつしよくの液体で本はどこまで読んだどころか何が書いてあるのかすらわからなくなっていました。

「どーしてクローゼットからあんたが出てくる！」

鼻から黒い液をだだ漏れさせたマリーはアルカに詰め寄ります。彼女は悪びれもしません。

「ん？ 決まつとるじゃろ。瞬間移動じゃよ、この水晶をゲートにして……」

「さも当然のように人外の技使わなとください！ ほんと相変わらずですわ師匠、あといくらなんでも会って数時間の男の子に手は出しませんで」

「ん？ そうかえ？」

「当たり前です！ 私をなんだと思っおもっているんですか！」

アルカはせせら笑います。

「どの口が抜かすか。この前なんか繁華街のホストクラブの前で入ろうかどうかうろうろして結局断念してたではないか。動きが童貞どうていそのものじゃったぞ」

「どーてーちゃうわ！　しょ……ってあんたドコまで知ってんの？　ってか何？　監視されてたの？　ここバレてたの？」

「ま、踏みとどまったのは褒めてやろう……自分の立場を忘れていなかったようじゃの、だから預けるのさね。改めてよろしくの、マリーちゃん」

「……ハイヨロコンデー」

マリーは苦虫を噛んだかのような表情で返事をしました。いえ、苦虫を噛んだどころか噛み砕き菌茎にすり込んだくらいいの苦渋の表情です。

言いたいことを言った後、モソモソとクローゼットの中に入ろうとするアルカは思い出したように背中を喋り出しました。

「あ、そうそう。お主、今日かなりロリババア連呼していたから罰として古代ルーン文字で小さな不幸が降りかかる呪い掛けといたぞ」

「何してんの！　古代人の叡智を駆使してメチャクチャくだらないことしないでください！」

そんなアルカに猛抗議しようと詰め寄った瞬間です。

ガツン！

「ふぐー！」

テープルの脚に足の小指をぶつけ、マリーは悶絶するのでした。アルカはその様を見て目の端に涙を浮かべるほどケタケタ笑うとクローゼットの中に消えていきました。

さて、心の折れたマリーはというと、テープルに突っ伏してチクシヨウメチクシヨウメと恨み節を繰り返しそのまま寝てしまったのでした。

豪快にテープルの木目を顔半分につけたマリーはトントンという規則正しい音に反応して目を覚まします。

古めかしい木枠の窓から注ぐ朝の日差しを鬱陶しく感じながら根気よく見つめたその先には、

「ルールルルルルルルルルリラ——」

昨夜、急に現れた軍人志願の少年ロイドが鼻歌を歌いながら台所に立っていました。慣れた手つきで青菜を刻んでは火にくべた鍋の中に放っていきます。

「あ……あのまま寝ちゃったのか」

ミシミシと音を鳴らしながらゆっくりと起こした体からするつと毛布がずり落ちます。マリーがああ少年ロイドがかけてくれたのだらうと察した時、その音に気がついたのか彼は柔らかな笑みで声をかけてきました。

「あ、おはようございます……すいません。お台所お借りしています」

「はよぎーす……あーいいのよいいのよ、それよりも毛布ありがとね」

「本当はお部屋に運びたかったんですけど女性の部屋に勝手に入るのはちよつと気が引けたので……」

マリーはその言葉を聞いて自分の女性らしからぬイーストサイドめいた寝室の惨状を思い出し、ホッと胸をなでおろします。

彼女は「紳士ねー」とごまかすように口に出しながら亜麻色の髪を手櫛で直し、ロイドの手元を覗き込みます。彼はつまみ食いしようとする子供をたしなめるように声をかけました。

「ちょっと待ってくださいね、今パンケーキ焼きますから」

今度は平鍋を火にかけて油をひくと溶いた小麦で手際よくパンケーキを焼き上げます。小麦の香ばしい香りに食欲をそそられたマリーは寝起きとは思えなくらい機敏に皿とはちみつをテーブルに並べました。

パンケーキともう一品、青菜のコンソメスープを添えた朝食にマリーは言葉を失いました。

「簡単なものしかできなくてすいません」

「……………いえ」

朝起きたら朝食ができているという状況は独り身にとつて至高の喜びです。加えて昨夜、あの角と金棒がないだけで本質は地獄の鬼と大差ない元師匠の横暴を受けた後です。さりげない気遣いとコンソメスープの香りが心に染み入りました。

「——これならずっつといてくれてもいいくらいね」

「はい？」

「ああなんでもないわ……………んじゃゴチになりまーす」

そう言うマリーは豪快にパンケーキにかじりつきます。香ばしい香りのパンケーキにはちみつを浸すほどぶっかけては口に頬張りリスのように頬を膨らませて、コンソメスープで流し込みました。

「美味しいわーあ！ 最近缶詰しか食べてなかったからこういうのサイコーね」

「え？ 缶詰ばっかですか」

「ええ。魔女だからね」

古来から伝わる魔女のイメージに喧嘩を売るイーストサイドの魔女はパンケーキを三枚ペロリと平らげた後優雅にコーヒートを淹れすすり始めました。

その満足げな顔を見て柔和な笑顔でロイドは後片付けを始めます。一方マリーはその軍人志望らしからぬ自然ないいお嫁さんっぷりに思わず素直な疑問を口にしてしまうくらいでした。

「え？ ロイド君、本当に軍人志望なの？」

「あ、はい……………すいません」

皿を洗いながら律儀にこちらを振り向くと、ロイドは小さく頭を下げます。

「あ、いやいや謝らなくていいんだけど」

そこでマリーはこの少年がコンロンの村の人間だということを思い出しました。「愚問ね」と彼女は失念していたことを自責した後、皿洗いをする少年の背中に向けて試験について話し始めるのです。

「アザミ王都士官学校一般募集試験は今月の中旬だからまだ先ね、試験内容は知ってる？」

「えっと武術試験と魔法に関する筆記試験、あと面接ってくらいしか」

「ええ、毎回ちよつとずつ変わるけど大体はそうね。一番大事なのは武術試験だから」

「あ、やっぱそうですか」

「そうそう、魔法は得手不得手あるしある程度知識があればいくらい。軍人の仕事は基本警備とか力仕事。結局は体力がなきゃね」

「うう」

「加えて最近では責任者のメルトファン大佐がかなり気合入っているらしく、色んな場所に募集をかけているそうね……明確な定員はないけど倍率は高いわよ」

そしてマリーは「今回は武勲で名を馳せたりドカイン家の長男、噂のベルト娘、悪名高い女傭兵……」と次々に口にしますが大陸最果ての村から来たロイドにはいずれもピンときません。

「はあ……詳しいんですね」

「魔法だから、つてわけでもないけど雑貨屋だからなんでも扱っているって感じよ。特にここイーストサイドじゃお金持っていない人間が多いから薬の対価として情報をもたらしているわけ」得意げになりコーヒーをすすするマリーとは対照的にロイドの顔は曇りっぱなしです。

「やっぱ体力とかメインですか……うう……自信ないなあ」

その言葉にマリーはコーヒーカーップに口を付けたままピクリと眉を動かします。そして怪訝

な顔をロイドに向けるのです。

「何言ってるんの、あのアルカ師匠の村の人間でしょ。むしろ面接とか一般常識が心配よ」

「いえ……あの僕、本当に体力に自信がなくて」

そう言いながらロイドは頬をポリポリかきながらうつつむき加減になり続けます。

「ここ来るのに六日もかかりましたし」

マリーは何言っているんだこの子はと即座に思いました。あの最果ての村から馬車や汽車を乗り繋いで六日で王都に来た……そのことと体力に一体何の関連性があるのだろうか。

(ハハハ、まさか徒歩で六日とかそんなバカな話——)

笑いながらコーヒーをすすするうとした瞬間、

「ありうるっつ!!」

褐色のコーヒーが容赦なく飛び散りました。それを拭きもせず、まさかという顔で念のためにマリーはロイドに問いただします。

「……汽車の話よね？」

「え? 走ってですけど? そうですよね……六日じゃ遅いほうですよ……うちのじいちゃんなら二日で十分って言っていましたし」

沈黙が部屋を支配します。

「いやいやいやいや! ロイド君! あなた強いわよ!」

「あ……励ましてくれてありがとうございます……根性だけはあるって言われていますけど、自分の体力のなさは自分が知っていますから……」

「マリーは冗談言ってるんじゃないわよといった顔でロイドを覗き込みますが、当の本人は変わらぬ純粹無垢な困り顔のままでした。情報も扱っている手前、マリーにはそれがウソかホントかを見抜く自信がありました。」

（ウソはついていないみたい……ってことはマジか……）

人外魔境……コンロンの村から出てきた村一番の優男……かの村を基準にしたとあっては常識など雲散霧消してしまいます。

確かめるように……いえ、悟すようにマリーは質問を続けました。

「でもここに来る道中、モンスターとかに会わなかったかしら？ あそこから来たら結構ヤバイモンスターもいるはずだけど？ あれ倒せたら相当な力の持ち主よ」

「いえ、運がよかったのかモンスターには一度も出会いませんでした」

「……そう」

「でも動物には沢山出会いました。大きなイナゴとか火を噴くトカゲとか」

「それモンスター！ しかもヤバイ奴！」

その言葉を聞いてロイドは冗談ですよねと笑いながら返します。

「アハハ。いくら僕でもモンスターと動物の区別くらいは付きますよ。モンスターってアレで

すよね。『世界を我が物に』なんて言いながら第二第三形態とか色々変形する……」

なんかとんでもない背筋が凍る話を聞いてマリーは脱力しその場にへたり込むのでした。

（ちよつと！ なんてこんな奴を王都に送り込んできたロリババア！ とんでもない代物送ってきて！）

常識について、モンスターについて、説教でもかましてやりたいところですがロイドは純粹無垢な好青年です。本当に弱いと思いついて入っているのかと思うと、責めるに責められずどうしたものかとマリーは頭を抱えました。

「僕の特技と言ったら家事くらいです……あ、掃除は村一番って言われていますね」

「ああ掃除ね……何？ 敵の始末とか？ 侵入者の死体の処理とか？」

「敵？ 処理？ いえ、普通の掃除ですけど」

その反応に「そう言われてみれば」とマリーは台所のほうに視線を向けます。思い起こせばそこもプチーリストサイドと名乗れるほど空き缶と空き瓶と調合薬のカスやらで埋め尽くされていたはずでした。

しかしなんとということでしょう、ロイドの手によって台所は陽の光をまばゆく反射させるほどの輝きを取り戻していました。

（気弱で家庭的な優しい少年……あの師匠が気にかけるのも無理ないわ、モロタイプじゃない）
タイプの件はひとまず置いて、マリーは素直に「すごいわね」と口にします。その言葉を聞

きロイドは「そんなことないですよ」と謙遜はしますが満更でもない御様子です。自信に満ちた表情全開でした。

「えへへ。実はこれ、コツがあるんですよ」

「なにに？ 家庭の知恵ってやつ？」

「多分そんな感じですよ」

マリーは是非ともご教授願いたいとロイドのそばに立ち彼の手元を眺めます。そしてロイドは実演販売のように颯爽と雑巾を取り出しました。

「この雑巾にですわね」

「うんうん」

「古代ルーン文字で一筆したためてから拭くとさっと汚れが落ちるんですよ」

「そんな家庭の知恵あるか！」

まさか古代の叡智を家庭の知恵扱いするとは思ひ、マリーは盛大に声を荒げました。それに驚いたロイドはいつもの自信なさげな顔に逆戻りです。

「だ、ダメですか」

「ダメじゃないけどダメですよ！」

言い放つた後、マリーは壁に頭を打ち据え始めるのでした。

(しかもさーそれさー『解呪』のルーン文字じゃない……あたしはそれを習得するために何年

もあのアルカ師匠の下で頑張って使えるようになったっていうのに！)

大工仕事をしているかのように壁にゴンゴン頭を打ち据えているマリーにロイドは無意識に追い打ちをかけます。

「なんか知らないんですが、なんかの副作用でなんか汚れもホコリも一緒に落ちるみたいで」

「なんかかって！ あたしの努力をなんかかって！」

混乱しきりのマリーは涙を浮かべ壁にもたれかかりました。もしこの時ロイドが約三か月でこの古代ルーン文字を習得したと聞かされていたら、きつと頭を打ち据えまくって壁には人間大の穴ができあがっていたでしょう。

で、ロイドはその様子をどうしたらいいのかと眺め、謝るばかりです。

「ごめんなさい……大したことないですよね……あとは雨を降らせる魔法ぐらいしか……」
壁に人間大の穴が空きました。

「——やっぱあの村の人間ね……常識ってなんだっけ……」

ロイドが魔女の雑貨屋に居候することになってから早数日が経ちました。

雑貨屋……とは言っても商品が並んでいるわけでもなく、お客は近所の顔なじみがお喋りしたりするついでに薬をもらっていく、なんて場合がほとんどです。

というわけでお店は基本的に開店休業です。マリー一人でまわるのでロイドは専ら掃除や

洗濯といった家事や買い物などに従事していました。王都でもいいお嫁さんっぷりですね。さて、ロイドが買い物に出かけたある日のことです。マリーの店に近所の大工の棟梁が来ていました。

「うっし終わったぞマリーちゃん」

彼はシワだらけの細腕から繰り出される熟練の槌捌きで、壁に空いた穴の修理をあつという間に終え、道具を片付け始めているところでした。マリーは笑顔で労います。

「ありがとね棟梁」

「いいってことよ、マリーちゃんにや女房の菓を何度かタダでもらってっからな。こんぐらいサーブスだ。しかし一体なんでこんな穴空いたんだ？何かぶつけたか？」

「アハハ……そんなことよりお茶淹れたから少し休んでいってよ。もう年なんだから」

棟梁は「すまねえな」と椅子に腰かけると、一気にお茶を飲み干しました。

「うめえ！久しぶりだなあお茶。最近茶葉も高くなっちゃったから白湯はっかりだよ」

「そうよね、値上がりする前にたくさん買い置きしててラッキーだったわ。でも一体どうしちゃったのかしら？」

嗜好品や食品などの物価が最近じわじわ上がってきていることにマリーは小首をかしげます。その傍らでお茶を飲み干した棟梁は口の滑りがよくなったのか色々話しました。

「いやー聞いた話によるとな、商人がよく通る西の街道が落盤事故とかあって封鎖されちまっ

たようなんだ」

棟梁が言うには何日か前に商業用の街道が崖崩れで通るのが困難になっているそうです。

「あの道封鎖されたら馬車は遠回りすることになるわね」

「それだけじゃねーんだ。中央の街道に迂回してもよ、そっちじゃ最近はいナゴみてーなモンスターが活発で、商売になんねーみたいだ。だから今は街じゃジオウ帝国の産物が多く出回ってるそうさ」

「だからか……そりゃ割高にもなるわね」

近年、仲のよろしくないこの国の北に位置するジオウ帝国からの輸入品です。足元を見られて高く売られつけれられても仕方ないことでしょう。

「んだからよ、街の人間はジオウ帝国が街道を爆破したんじゃないかと噂してるな。もしかしたらモンスターも連中が仕向けてるんじゃないかって……この前なんか町中にもでっけえイナゴが出たんだ。数年前じゃ考えられねえ、お国の警備は何やってんだって話だ」

「……ホントお国の考えることはわからないわね」

まるで実感のこもったかのようにマリーは相槌を打つとお茶に口をつけます。

「ってなわけでアザミの商人の間じゃ戦争を望んでいる奴が増えてきているそうさ……戦争したがる王様の後押しになりそうだな……いやだねえ戦争なんざ」

弁士のように喋り倒す棟梁の前で、マリーはこの偶然にしてはできすぎている一連の流れ

に疑問を抱いている御様子です。

〔落聲事故とモンスターに戦争……本当にジオウ帝国の作業なのかしら？〕

マリーが顎に手を当てて考えている間も棟梁の王家への不満は止まりません。

「まったく王家はロクなことしやがらねー、イーストサイドの治安ほっぽってるしよ。中央区の王様の銅像知ってつか？ あの実物の小太りとは別人みてーなモデル体型の奴、あんなの作る暇あったら警備に金回せってんだ」

「それは同意ね、まるで別人だもの」

「加えて王女様は数年前から行方不明。どうなるんだかこの国は……ってマリーちゃんに愚痴言ってもしょうがねえな、ハハハ」

そして棟梁が「また何かあったら呼べよ」と手を振って店を出ていこうとしたその時です。

古めかしい扉が軽快に開くと純朴そうな少年——ロイドが荷物を抱えて帰ってきました。

「ただいま戻りました！ あれ？ 大工さんじゃないですか？ どうしたんですか？」

大きめのズタ袋を床に下ろすと、これまた律儀に手を前にしてお辞儀します。

「お、少年。いや何、マリーちゃんに頼まれて壁を修理してただよ、タダでな」

「た、タダですか？ いいんですか？」

驚くロイドに対し棟梁が得意げに手のひらで鼻を擦り上げます。

「へっ、こんな修理、朝飯前のこんこんちきよ！ あとなんつってもマリーちゃんにや世話に

なつてっからよ。俺らみてえな貧乏人に葉分けてくれるんだ。まさに救いの神！ イーストサイドの救世主よ！ マリーちゃんの英雄譚はいつか大陸中を駆け抜けるぜ！」

「救世主……やっぱマリーさんはいい人なんですね」

壮大なスケールで褒めちぎられたマリーは顔を真っ赤にして声を荒らげます。

「ちょ！ 棟梁！ 私は大したことしてないっての！ 代わりに情報とかもらっているしギブアンドテイクじゃない！ 救世主でもなければ大陸中を駆け抜けません！」

その反応を見て陽気に笑いながら棟梁は店を後にします。なんとも小つ恥ずかしい状況を誤魔化すようにマリーは咳払いをします。

「コホン！ もう……で、ロイド君、ちゃんとお買い物でできたのかしら？」

まるで姉のような口ぶりでマリーは尋ねます。それもそのはずです。彼女はコンロン村という異端中の異端な所からやってきたロイドに少しづつ常識に慣れもらうために買い出しをさせていたのです。

〔ま、物損事故くらいなら許容範囲ね。人身事故が起こったらロリババア呼びつけて回復魔法でもさせようかしら……たしか死人以外なら完全に回復できるとか言っていたものね……今思いついてもドン引きだわ死人以外って〕

彼女をよそに、ロイドは実に爽やかな笑顔で買い物の成果を見せます。

「あ、はい。えつとスリコギに乳鉢と小麦粉……あ、あと、えへへ、お土産です！」

「お土産？」

彼が床に置いた先程からやたら目を引くズタ袋の口を広げると、そこには大量の茶葉が詰め込まれていました……色艶のいいひと目で高級品とわかる格調高い香りのする代物でした。

お土産というには余りにも大きすぎる……加えて値上がったとい先刻話題に上がったお茶を訝しげに眺めた後、マリイはロイドに問います。

「……………なんぞこれ」

「あ、西の山を越えた所の農家の方からもらったお茶っ葉です。お礼だつて」

（あれ？ 西つて今崖崩れで大変なんじゃ……）

マリイの頭にはまずなんのお礼かより、そんな渦中の農家の人が気前よく渡すはずがないと考えます。詐欺か何か……疑心に溢れた顔でマリイは問います。

「ほんとに西の農家の人がこのアザミ王国に来ていたの？」

マリイの質問にきよんとしながらロイドは答えます。

「え？ 来ていませんよ」

「はい？」

なんとも繋がらない会話にロイドはあつけらんとしたまま、とんでもないことを口走ります。「ですから西の農家の人からもらったんです。山二つほど越えた村に買い物に行つてです。小麦を安く買うために。その途中で——」

「……………やまふたつ？ え？ そんな遠くにいったの？」

「え？ やだなあ歩いて行ける距離じゃないですか、それに買い物出して普通そのくらいの距離の村に行きますよね」

ガンツ！ と、マリイはせっかく直した壁に頭を打ち据えます。奇しくも棟梁が頑丈に作つてくれたので傷一つ付きませんでした。付いたのはマリイのおでこのほうです。

匠の技が光る一方、頭を打って涙目の光るマリイは悶々と頭の中でツツコミを展開します。（確かに国内で買えなんてひと言も言つてないけど！）

——ちなみに、コンロンの村では買い物というのには山三つか四つ越えた先の村で物資を購入するのがあたりまえでした。一般人なら何日もかかる行程を件の村人らは小一時間で済ませてしまいます。

さて「買い物とはなんぞや」という哲学じみたことで頭を痛めるマリイにロイドはさらに追い打ちをかけます。

「いやーなんかその途中道路が混んでいまして。どうやら崖崩れのせいで道が塞がっていたみたいで、とりあえず岩を全部取り除いて端に寄せておいたんですが……そしたら業者の人が『神様じゃあ』なんて言つてお礼に替りて摘みたてのお茶っ葉をもらつたんです。小麦粉もほとんどタダで購入しましたし……神様なんて大げさですよね」

「……………ウンマアネ」

「端に寄せるだけで僕なんか一時間もかかっちゃいましたし……村長だったら修復魔法で一瞬で戻せますし……都会の人ってお世辞上手ですな」

マリーは頭を押さえながら、とりあえず「次は国内でお買い物してね」と伝えようとします。

「ロイド君……色々言いたいことがあるんだけど、まず——」

それを勘違いしたのかロイドは慌てて頭を下げるのです。

「ご、ゴメンナサイ！ 余ったお金お小遣いにしていいって言われたからって、ちょっともらいすぎですよね……」

「あの、言いたいことはそうじゃなくて」

「本当は返金しなきゃいけないんでしょうけど……その浮かせたお金使っちゃったんです……コレなんです」

申し訳なさそうにロイドは懐から細工の施された雅なブローチを出しました。琥珀色のべつ甲つらでその周りに銀の装飾がふんだんに使われておりひと目で高価とわかる代物でした。

「どしたのコレ？」

「あ、プレゼントです」

「誰への？」

「マリーさんへのです」

しばし沈黙しマジマジとブローチを眺めた後マリーはもう一度問います。

「誰への？」

「だからマリーさんです。タダで泊めてもらっていますし、正直家事だけじゃこの恩は返せないと思います」

他意のない、やんわりとした表情でブローチを差し出す彼に対し、照れながらマリーはそれをぶつきらほうに「アリガト」と言って受け取りました。

(……やっぱ早急に常識を知ってもらわないとね、国外に買い出しもそうだけど……あんまり他意なく女の子にこんなプレゼントしちゃダメってこととか)

内心すごく喜んでいる自分に辟易しながら、マリーはいそいそとブローチを胸元に付け、鏡を見やります。改めて見ても値の張るであろう代物です。

「……コレ、結構なモノよね、イミテーションじゃないでしょうし」

「ああそれはですね、道中運河の水量が減って大きな船が使えないと嘆いていた貿易商の人がいたんです。その人のために雨を降らせたらかなり喜んでいまして『是非ウチの最高品質の物をもらってくれ』なんて言われちゃいました……タダは気が引けるので浮かせたお金全部で購入しました」

(お使いただけでこの国のインフラ問題を打開した！)

買い出しするだけでこの国の経済状態を回復するロイドにマリーは頭を振りながら「これだからコンロンの村人はツー」とへたり込むのです。

そしてロイドの買い出しは国だけでなく一人の女の子の運命も救うことになるのでした。

その女の子、地方貴族のセレン・ヘムアエンという少女は今、王都の安宿で試験当日まで過ごしていました。イーストサイド寄りのその宿は簡易宿舎のような作りになっていて客層も仮眠するだけの行商人などが大半です。

長期滞在には欠片も向かない所ですが事情のある彼女には干渉が少ないほうが都合でした。ポロイ部屋もその心配がないだけでお釣りの出るくらい居心地のいい空間でした。

ただ問題が一点、素泊まりなので食事が出ないという点を除けば……大抵こういう宿屋には共同の台所があり食材を持ち合わせ作ることが可能です。

しかし彼女は料理をしたことがありませんでした。加えて道中、干し飯ほしめしなどを湯戻しすらせず水と一緒に胃に流し込むような食生活を送ってきたため腹の虫は限界に達していたのです。

そして彼女はフードを目いっぱい目深にかぶると腹の虫にせつつかれながら重い足取りで市場へと向かうのでした。

サウスサイドの昼下がり、冒険者や行商人、観光客が行き交い買い物をする光景、その喧騒けんそうと活気に包まれた市場にセレンは圧倒されました。どこを見ても人、人、人でめまいすら覚えるほどでした。

「これなら夜に来ればよかったですわね」

軽い後悔をするも腹の虫は「そんなもん知ったこっちゃない」とうなり続けます。そこそこ大きなお腹の音も喧騒と雑踏に消えていくのです。

セレンはお腹に手を当てながら目ぼしい露店を探し出します。が、膨大な店の数に目移りしながら人波に流され思うように選べません。

「……ハア……ハア」

何もしていないのに旅路より疲れたセレンは肩で息をし始めます。そんな折、後ろのほうから香味油のいい香りが漂ってきました。

振り返るとそこにはカリッと揚げられた鳥肉の揚げ物を買っていました。他にも山菜や小ぶりの川魚が露店の大皿に盛りられています。道行く人はその香りに誘われて紙に包まれた揚げ物を購入しては塩を振りその場をかぶりついていました。

何日も温かい食事がありつかなかったセレンは生唾なまよだを飲み込みます。

ここで普通の人なら何の考えもなしに露店に足を運ぶのでしょうかがセレンは買い食いには疎あやうか買物すら満足にしたことがありません。十分な所持金を持っているのですが色々不安になって財布の中身を確認したりします。

「……むう」

そして他人の購入する仕草をフードの隙間から何度も確認し、頭の中でシミュレーションし始めるのです。初めておしゃれな美容院に入る前の挙動不信心に似ていますね。

しばらくしてお客さんの流れも途切れ、余裕をもって購入できる絶好の機会と一歩踏み出した矢先でした。

「すいません。少々よろしいでしょうか」

肩に手を置かれセレンは声のするほうに振り向きましました。

そこには深緑の制服にアザミ王国の紋章を縫い付けた軍人が二人、硬い笑顔で会釈します。逡巡するセレンに軍人は事務的に話しかけます。

「失礼ですが身分証など拝見させてもらってもよろしいでしょうか……最近、建国祭が近づいてきたせいか不審な輩が増えています……他国の工作員だの街にモンスターを手引きしている輩もいるとかで……」

つらつらと語り出す軍人にセレンは察しました。

「……私を不逞の輩と？」

確かにこんな青葉香る暖かい春先にフードを目深にかぶった人間が挙動不審にしているのですから、自覚のあるセレンはため息をつきました。

しびれを切らせたのか、事務的な軍人の後ろにいるもう片方が、やや強めな口調でセレンに問い詰めます。

「そんなあからさまな格好して疑うなど言うほうが無理がある、後ろめたいことがなければ先ずはフードを取ってもらおうか」

軍人がフードに手をかけようとした時、セレンはその手を振り払うとフードの隙間から顔を覗かせ睨み付けます。

彼女の顔面に巻かれていたのは血のようなシミの付いた禍々しい革のベルトでした。

乱雑に巻き付けた顔の隙間から落ちくぼんだ目で睨まれ、軍人は震えた声を漏らします。

「……べ、ベルト姫」

「中部地方の？ 軍人志願してきたのは本当だったのか……」

幽霊が何かを見た時のような声音、セレンはそれが不快でたまりませんでした。ギリッと歯をきませさらに強い嫌悪を乗せた視線を注ぎます。

その視線にさらに動揺する軍人に今度は周囲が何事かと騒めき始めました。『ベルト姫』の単語も聞きつけたのでしょうか、好奇の視線がフード越しにも感じられます。

「……」

いたたまれなくなつたセレンはその場から立ち去ります。軍人の制止も聞かず、人通りのないほうへと。

後ろめたい人間そのままの行動に対し忌々しげに独り言ちます。

「……何も悪いことはありませんのに……まるで悪党ですわね……」

——『呪われたベルト姫』と人々は彼女のことを口にします。

もちろんセレンのことです。彼女の生まれは大陸中央の豪商で俗に言う貴族でした。

青々とした肥沃な大地と起伏の小さい緩やかな地形、さらには大陸一の運河に面したその地方は大きな戦争が終わり、各国で交易が盛んになると瞬く間に栄え、この大陸の通商の要となるにはさほど時間がかかりませんでした。

そんな物流の盛んな地に珍しい物を集まるもので、彼女の父親は交渉の材料に、自己顕示欲のためにと東西のあらゆる珍品を収集するのが趣味でした。

その趣味が娘——セレンの人生を大きく狂わせることとなります。

セレンが四歳のころ、父の宝物庫で戯れに『呪いのベルト』と呼ばれる太古の装飾品を手にしてしまったのが悲劇でした。

宝物庫の石扉が開いているのを見て、家の者が駆け付けた頃には顔中をベルトでがんじがらめに巻き付けたセレンが部屋の中央で泣いていたそうです。

父親はあらゆる手段を用いベルトを外そうとしました。しかし一向に外れません。

高名な僧侶、東洋の商人、王都一の学者……誰も彼もさじを投げました。

そして月日が経つにつれ、初めは同情の眼で見ていた周りの人間もいつしか忌むべきものを見るような眼へと変わっていったのです。

大きくなって外れない血のような赤いシミのある革のベルト、片目が塞がっているため目つきも次第に悪くなり髪の毛もとても綺麗なプロンドが古びた家屋のヒビ割れから生える雑草のようにベルトの隙間から伸びてきます。

いつしか彼女自身も周囲の目に耐え切れなくなり、部屋にこもるようになりました。

そして彼女は高名な僧侶の言っていた「呪いに打ち勝てる相応の力を持てばいつしか呪いを解くことはできる」、その言葉にすぎないように日々鍛錬をはじめたのです。

来る日も来る日も部屋の中で汗水たらして体を鍛え、運バテしてくる食事を食らってはまた鍛錬、髪が伸びたらハサミでちぎり容姿も気にかげずひたすら鍛錬——気が付けば彼女の体は並の戦士では太刀打ちできないものへと変わりました。

色白で透き通った肌に似合わせぬ鍛え抜かれた体つき、ベルトのせいでミイラのような頭部、すべてを恨んだような暗い目つき……

その姿を見ていつしか世間は畏怖を込め『呪われたベルト姫』と口にするようになります。彼女は十五歳を迎えても一向に外れぬベルトに辟易した頃王都から軍人募集の打診を受けそれを了承し、今に至るのです——

好奇の視線にいたたまれなくなった彼女は隙を見て一目散に逃げ出します。

「——ま、待て——」

呪いを解くために鍛え上げた体はしなやかな猫のように裏路地を駆け上がりまです。そしていくつもの細い路地を通り別の開けた通りにたどり着きました。

もう一度フードを目深にかぶり直すと、セレンは今度は両手でお腹を押さえます。

「また体力を使ってしまったわ……流石に……何か食事を……」

先ほどの鳥肉が頭をよぎってしまいすっかり口の中が揚げ物になってしまったセレンは似たような露店を求めまた練り歩き始めました。

そしてようやく串揚げの露店を発見したセレン、しかしやはり勝手がわからないので念のため買い物客を物陰から観察します。今度は軍人に気取られないよう、距離を取り、数十メートル先の柱の陰で完全に息を潜めて。

しばらくしてテント地のズボンに麻のシャツといった少年がその串揚げ店の前に現れました。「揚げたてもらっていいですか？ 何かお勧めあったら教えてください」

「あいよ！ 今日はいいい鳥の胸肉を使っているからよお！ ささみ揚げがいいぞ！」

「あ、じゃあそれ一本……あ、いえ……二本で」

「食うねえ兄ちゃん！ ちよつと待ってな、すぐ揚げるからよ！」

店主は手際よく揚げた鳥の串揚げに荒めの塩を振って差し出します。少年はにこやかにお金を払うとそれを両手に持ちました。

その様子を見てセレンは独り言ちます。

「買ひ方は先ほどのお店と変わりませんのね。いえ、私が少し気にしすぎ——ッ！」

「あ、コレいります？」

自分の無知さに嘆息するセレンの前にいつの間にか先ほどの少年が立っていました。

いきなり声をかけられて彼女は身をこわばらせます。それを気にしたのか少年はやわらかい



口調で話し出しました。

「ああ急にすみません。お店で買い物している時ずっと見ていましたよね？ それでもしかし欲しいのかな？ なんて」

「……気付かっていた？ 気配を消していたのに」

セレンは訝し気な声音です。それもそうでしょう、念入りに距離を取り気配を消し物陰に潜んでいたもののに……アザミ王国までの道中何度かモンスターをやり過ごした経験もあつて気配を消すことには自信がありました。

加えて、警戒していた自分に気取られることなく眼前まで距離を詰められたのですから……そんな「何者？」と逡巡する彼女に対し、のほほんと少年は言葉が続けます。

「あはは、ご冗談を。木こりじゃあるまいし気配を消す必要なんて」

（木こりが気配を消す必要性はないと思うのだけど……）

そう思うのも無理はありません。なんせ木こりという名の上級狩人の類です。

頓珍漢な物言いにフードの下で眉根を寄せるセレンです。その戸惑いを感じたのか少年は少し申し訳なさそうな顔をしました。

「あ、もしかして僕、変に気を使っちゃいました？ だとしたらゴメンナサ……」
ぐぎゅう！

少年が言い終わる前に、セレンの腹の虫が雄たけびを上げました。

「……っつ！ こ、これはその……」

弁明するセレンに少年は無言でにこやかに串揚げを差し出します。

食欲をそそる衣と肉汁の香り。ほどよく振られた絶妙な塩加減。空腹。抗うすべなし。顔を伏せながらセレンはその串揚げを手にとったのです。

「わかります。僕も初めての買い物物の時は無作法がないかとか色々気にしました。田舎じゃ物々交換が基本ですし……でも都会だから気負わなく普通にしていればいいそうですよ。受け売りですけど」

「そ、そうですの？ 私普通に自信がなくて……」

「少なくともドワーフ集落の職人さんたちのように少しでも気に障ったら斧が飛んでくるようなことはないみたいです」

串揚げを頬張りながら少年は自身の体験談を語り始めます。

（ドワーフなんておとぎ話の種族のことを言ったり、木こりが気配を消すのがうまいとか言ったり、きつと冗談で私の緊張をほぐそうとしてくれていますのね）

実際は冗談でも何もなく、彼は自身の経験をよかれと思って話していました。背の低いドワーフには目線を合わせて交渉することが誠意だとかエルフには鉄を使った装備は極力身に付けないほうがいいとか……そんな親切心のこもったレクチャーは無駄知識どころか都市伝説に

近い内容です。今で言うなら「口裂け女に出会ったら館を投げつけると舐めだすからその隙に逃げろ」みたいな会話内容です。

セレンは最初こそ訝し気に聞いていましたが端々から感じる少年の気使いに次第に心を許していくのでした。べろりと串揚げを平らげた後、恥ずかしげに彼女は少年にお礼を言います。

「その、すみません……私ほとんど買い物したことがなくて……助かりました」

懐から財布を取り出していくらか出そうとするセレンに少年はにこやかに断ります。

「いえいえ大丈夫ですよ」

「そんなわけには」

「むしろあなたのお買い物の練習を邪魔しちゃったみたいですよ……そうだ！ だったらそのお金使つてあのお店で串揚げ買ってきてくださいよ」

「え、あ、練習ではなくて……」

「不安なのはわかります。だから自信もつて。ちゃんと後ろで見ててあげますから」

なし崩し的に買い物の練習を促されたセレン。しかし不思議と悪い気はしませんでした。

(後ろで見ててくださる……ね)

こんな風に自然な感じで話しかけてもらったのも久しぶりです。むずがゆい気持ちのまま、コクンと首を縦に振ると小走りで先ほどの店に向かいました。

(お返しに何本か多めに買いますよ……いえ別のお店でもっと違う物のほうが……)

色々想像を張り巡らせるセレン。

しかしその視線の先に先刻の軍人が辺りを見回しながら人波を掻き分けていました。

きつと自分を探しているのだろう、セレンはすぐさま感づく眼光鋭く逃げ道を模索します。

その時、ふと後ろにいる少年が目に入ります。彼はやんわりとした物腰で優しくセレンを見守っています。

(…………もしここで私の醜いベルトまみれの顔を……あの少年に知られてしまったら) あの柔和な笑みが嫌悪感に塗り替えられる想像にセレンは耐え切れませんでした。

「…………いたぞ！」

その逡巡で隙が生じたのか、軍人に見つかってしまいました。

「マズいですわね」

あの少年と別れるのは辛い、でも自分のことがバレてしまうのはもっと辛い、そう思ったセレンは少年のほうを名残惜しげに一瞥すると全力で逃げ出しました。

待て！ という制止も瞬く間に後ろへ消えていくほど一目散に、全力で、後ろ髪を引かれる思いを振り切るように彼女は細路地へ駆け込みます。

一歩一歩を大きくスライドさせて跳躍するように路地へまた路地へ身を潜めるように隠れるようにセレンは逃げ出します。自分自身の呪いに対する後ろめたさを暗示しているかのように入り組んだ場所へと彼女は迷い込みました。

「…………ツ、ハァ…………ハァ…………逃げ出せたのはいいですが…………どう帰ろうかしら…………」
土地勘などなく、もはやイーストサイドなのかサウスサイドなのかもわかりません。

建物の隙間、風化したゴミの類や雑草の生え方から察するにおそらくイーストサイド、そう考えたセレンがどう帰ろうかと考えていた矢先でした。

その隙間に真新しい何か生臭いものがあります。おそらく誰かが放置した生ゴミか何かだろう、口元を押さえ立ち去ろうとした時その生ゴミに突然何かが覆いかぶさりました。

極彩色の薄羽をはためかせ嬉しそうにイナゴが顎でその生ゴミの塊をむさぼっています。それだけでも嫌な光景なのですがなによりおぞましいのはそのイナゴの巨軀でした。

成人男性の身長ほどある高さ、全長はおそらく四メートルにも及ぶでしょう。そんなイナゴが建物の隙間から這い出してきたのです。

生ゴミの正体はおそらく野犬か何か、無残に食いちぎられたその肉片はかろうじて動物の皮だけがわかるくらいでした。

そのイナゴはセレンを見たとき、建物の壁を削りながらこちらへと身をよじらせ這い出てきます。一瞬思考の制止した彼女は距離を取ることができませんでした。

「虫？ いえ？ モンスター？」

先ほどの軍人が口走っていたことを思い返します。すぐさま腰元のレイピアを手に取り鞘から抜こうとします。

「ギイイ！」

威嚇音と共に距離を詰めるイナゴは刀身をすべて抜く前にセレンに肉薄してきました。

万事休す、セレンの脳裏に諦めがよぎった次の瞬間でした。

細路地の上空から何かが飛来します。

覆いかぶさった影にイナゴは気を取られます。そして。

「よいしょ」

ぐしゃりとその硬い体をひしゃげさせイナゴは明後日の方向に顎を向けました。力なくその顎を所在なげにギイギイとうごめかします。

上から降ってきた——先刻の柔和な笑みが印象的な少年は、はみ出した極彩色の薄羽を掴んでゴミを隅に寄せるように無造作に放り投げました。

ズズン——

虫と思えない重量感のある音を細路地に響かせ、イナゴは足を折り曲げ息絶えました。

セレンからしてみたら目を疑うような光景でした。細い路地で動きにくい状況であの得体の知れないモンスターと戦う……危機的状况に死すら頭によぎっていたのですから。

そんな覚悟をあざ笑うが如く、モンスターを軽々と踏み付け吹き飛ばす少年、開いた口が塞がらないまま少年の背中をただただ眺め、地面へたたり込みました。

「大丈夫ですか？ お怪我は？」

少年はまるで何事もなかったかのようにそう言いながら、柔和な笑みで手を差し伸べます。

「え、ええ」
 伸ばした少年の手を取ったセレンは、その鍛え上げた戦士とは程遠い自然な肉付き、日々の生活で培ったであろう自然な筋肉……とてもあのモンスターを倒したと思えないと驚きを隠せませんでした。

その少年はその自然な体つき、物腰、表情、すべてに裏のない雰囲気を感じてセレンの身を案じているのです。

「あり、がと、ございます」

「ちょっと初めての買い物でパニックになっちゃって逃げちゃったんですね？ 心配しないでください、斧なんて投げてきませんから」

そう言うと少年は彼女の肩をポンポンと叩き「大丈夫ですよ」と声をかけ服に付いた泥を払い始めました。

動揺し、されるがままになっていたセレン。そのため不覚にも彼の手がフードを外すのを止めることができませんでした。

「あ、ああ！」

現れたのは件のがんにがらめの顔です。慌てて彼女はフードを被り直し縮こまるように下を向き震えます。

(……また不気味がられる)

「あの……」

しかしロイドは不気味がるところかそのままもう一度フードを外すと変わらぬ笑みのまま赤子をあやすように優しく頬を拭き出します。

「顔にも泥、付いていますよ」

セレンはこの顔を見てもまだ変わらぬ笑みを浮かべたままのロイドに呆けてしまっています。

「うーん都会ってこんなファッションが流行っているのかな？ ……よくわからないなあ」

みなさんも海外のファッションショー等を見てみてください、きっと同じ気持ちに浸れますよ。さて少年がぼそりと口にした疑問もセレンの真つ赤になった耳には入ってきませんでした。

しばらくして呆けていたセレンが我に返ると今度は赤くなったであろう顔を隠すためにフードをぎゅっと目深にかぶります。

そして上目遣いで少年を視線で追いました。彼は何かを思い出したようで少し慌てています。

「あ、帰って夕飯の準備しなくちゃ！ すいません。急いで帰ります」

と言葉を残し去って行こうとしました。セレンは慌てて名乗ります。

「あのー！ 私ほっ！ セレンといいますー！」

「あ、ご丁寧にどうも。僕ロイドといいます。それじゃ」

少年……ロイドはそう言い残すとフリーラン選手よろしく階段を駆け上がるように建物の壁

を蹴り上がりながら姿を消してしまいました。

「……………」

セレンは彼の去った後、頬に触れた感触を確かめながらしばらく惚けていたのです。

その日の夜、セレンは買い出し品を抱え、宿場へと向かっていました。

フードを目深にかぶっている彼女の纏う雰囲気は数時間前では考えられないくらいとても軽やかで、通りを歩く足取りもどこことなくダンスのステップを思わせます。調子に乗って買い込みすぎた商品も苦もなく持ち運んでいました。

それもそうでしょう、彼女の頭の中にはあの自然な笑みを携えたロイドのことがずつとりフレインされているのです。

（王都にいればきつといつか会えますわね……）

そう思うと彼女の顔はほころびます。ベルトで締め付けられたがんじがらめの顔はほころんでもただ軋み歪むだけの異様なものでした。そして、それすら見ても変わらぬ眼差しを向けてくれたロイドに思いを馳せてしまうのは無理からぬことです。今までなら――

「……あん？　けっ、噂は本当だったみたいだな……ベルト姫が軍人志願するって話はよ」

そう、こんな風にまるでお化けでも見たかのようにベルト姫と言われ続けたからです。彼女の和やかな雰囲気が一転して抜き差しならぬ剣呑な雰囲気へと変わります。

大きく見開いた片目でセレンは声の主を探ります。その先には腰に戦斧を携えた二メートルに届かんとする筋骨隆々の男が彼女を見下していました。

その体軀と荒っぽい言動に反して身なりはとても整っていて上流階級の雰囲気を感じさせます。セレンはその身なりと装飾品から記憶をたどりま。

（リドカイン家……地方の貴族……武勲で名を馳せたところね）

それだけ確認するとセレンは面倒事はゴメンと興味をなくしたそぶりを見せ歩み出します。

「オイ、無視してんじゃねーぞ。てめえがどんだけ地方貴族の評判下げていると思ってるんだ」

（そんな話聞き飽きたわ）

自身の怪談めいた話が尾ひれを付けて広まっているのをセレンは知っていました。そしてそれが地方貴族全体のイメージ低下に繋がっていることも。

「気味の悪い女だぜクソ」

リドカイン家の男は悪態をつくときどき立ちを隠さず食堂の明かりの中へ消えて行きました。

そんな言葉もごまんと聞いたわ、とセレンは独り言ち、数秒後にはまたさっきの少年との出会のシーンを思い出して悦に浸っていました。

宿につき、ベルトの隙間からツタのように伸びるプロンドを見ては驚く店員を気にも留めずセレンは部屋へと早々に引きこもります。

そして泥の付いたフードや軽装などを外しました眺めては思いを馳せます。

「あの方の払ってくれた服……」

いっそ思い出として洗わずにとっておこうかとも考えましたがせめて顔はこんなでも綺麗な身なりでと思い直し桶に水を張り衣類を浸します。

そんな彼女は、ふと鏡に映った下着姿になった自分を見て物思いにふけるのでした。

白く下着だけを纏った白い肌……肌は白くとも幼少期から本意にいい続けられた肉体は色白さに似合わずとも引き締まり、石膏像を彷彿とさせます。加えてその体にまるでとって付けたかのように据えられた、赤いシミの付いたベルトが巻かれた頭部。

大昔は見るのもつらかったこの姿ですが今ではもう何の感慨も湧きません。別人を見るように眺めるだけです。

——ただ今日は違いました。少年、ロイドの一件で少し心境が変わり大きく見開いた片目を見ながら「化粧でもしようかしら」と寂しく独り言っていました。

無駄かもしれないという葛藤が顔のベルトのように彼女の胸を締め付けます。

「こんなベルトがなければ……」

ベルトを伝うようにゆっくりと涙がこぼれ落ちました。

今しがた生まれた淡い想いも、思い描いた未来も、この肌に吸い付いて離れないベルトのせいで叶わないのです。

久しく思い出すことのなかった「悲しい」という感情……これが本当の恋だったんだと気が

付き、また涙を流します。

ひとしきり泣いた後、乾いた瞳でベルトを睨み付けたセレンは憤りをぶつけるようベルトを引き剥がそうとします。

皮膚が剥がれてもいい。

半ばヤケクソな衝動で外そうと試みました。

震えるほど指を喰い込ませ歯を軋ませながらベルトに手をかけます。

しかし彼女の顔に巻き付けられたベルトは石のように固く彼女の顔を締め付け続けるのです。

——いつもだったら、そうなるだけのはずでした。

するり、と、ベルトが解けます。

「え？」

セレンの口からは短いひと言が漏れるだけでした。

そして数分固まっていた彼女はまた思い出したかのようにベルトを外し始めます。

何の抵抗も見せずすると解けるベルト、そこから先はプレゼントの包装を剥がす子供のようにならないうちに無我夢中でベルトを引っぱがしていきます。

「う……そ」

すべてのベルトが外れ鏡に映る自分の顔。十数年ぶりに出会う自分の顔は赤の他人を見ている錯覚にとらわれます。



鏡の中にはプロンドの髪の毛を携えた美女といっても過言ではない顔立ちの少女が映っているではありませんか。確かめるように頬を手で触ると目の前の美少女もまた同じ仕草を見せました。

「私……なの？」

鏡に映る少女はセレンと同じ言葉で口を動かします。それを見た彼女の目から涙が溢れてきました。

「私だ——」

泣き崩れるセレン、思い浮かべるのはあの少年の顔と昔牧師に言われた言葉です。

『強き者の力でその呪いは解ける』

自然に少年が触れてくれた頬を指でなぞります。

「あの人だ」

自分の体を抱きながらもう一度つぶやきます。

「運命の人だ……」

お読みいただき、ありがとうございます。

試し読みはここまでとなります。

続きは2月発売の本編でお楽しみください。

